

新聞圖會 第 31 号

香もふりと嫌りかせられど娼妓小櫻もていつのぬ
 挨拶小男いぐつと取のちせ在り小刺刀取り早く已ぢ
 咽喉と横へ八分深き二分程傷付たとおんと痛癢やも
 程がゆる双方承知で相死をひるさ馬鹿の大間といふ

らん
 おい
 こき
 かりよ
 夫婦か
 閨房小入り

東京の開化進歩も速らからんと思の外今が大間技あり虚言ふり
 何らぬ本所荒井町中島屋の雇人橋立庄吉ある者六月八日まじ午煎の
 十二時新吉原京町の石野和助が樓上の酒宴の奥も夜と遠ひ何とあく
 薄ければ二時頃よりさや

△
 ひとり
 傷付て
 醜名を江湖
 小流すハ白痴の
 勸進元とハハハハ
 世間の若者め
 鑿るる五と。

○真事詩
 百二十号出た



新報

八尾善板

